学校と博物館をつなぐ情報誌　No.２１９（令和２年１０月号）

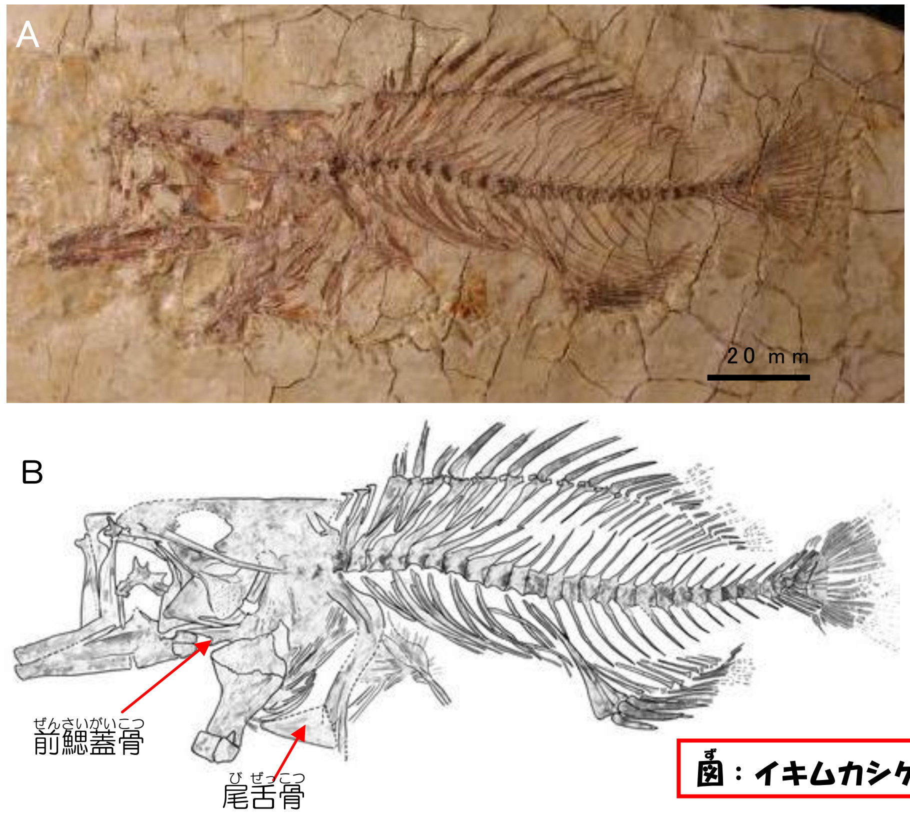
いのちのたび

〒805-0071　北九州市八幡東区東田二丁目４番１号
Tel 681-1011　Fax 661-7503
HP　http：//www.kmnh.jp/
発行：いのちのたび博物館　ミュージアムティーチャー

みなさん、こんにちは。僕、シーラカンスの「ラッティ」！
僕のことをこよなく愛してくれる籔本美孝博士（当館の名誉館員）が、今回またもや「新種」を発見し、日本古生物学会が発行する学術雑誌「Paleontological Research」で発表したんだよ♪しかも、学術雑誌の表紙を飾ったんだ♪♪今回の情報誌で、詳しく紹介するね。

新種「イキムカシケツギョ」初公開（11月27日まで・予定）

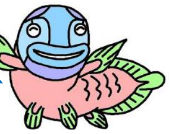
展示場所：リサーチゾーン入口



【和　名】　イキムカシケツギョ
【和名の意味】壱岐にかつていたケツギョ
【学　名】　*Siniperca　ikikoku*
（シニペルカ・イキコク）
【学名の意味】種名「イキコク」
壱岐の地名の由来である古名で、かつて存在した一支国の名に因む
【体　長】　約13 ㎝
（化石の大きさは 22 ㎝程度）
【産地・地層】長崎県壱岐　長者原層
【時　代】　新生代新第三紀中新世中期
（約1500万年前）
【本種の特徴】①前鰓蓋骨後背部に小突起をもつ
②尾舌骨の幅が広い
③背鰭の軟条が１２本
④体の太さが中ぐらい

図：イキムカシケツギョの化石（展示標本とそのスケッチ）

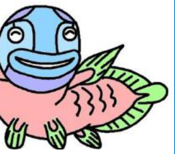
この標本は、「**完模式標本（ホロタイプ）**」といって発表された論文で命名者が指定した唯一の標本で、その種の基準となる標本なんだ！つまり、**世界に１つしか存在しない標本**なんだよ！すごいでしょ♪
ここで籔本博士に質問！『イキムカシケツギョ』が発見されたことで、どのようなことが分かったの？



やぶもとよしたかはかせ
籔本美孝博士

「ラッティー」君！とても良い質問だね。『イキムカシケツギョ』はケツギョ属に分類されるんだよ。大昔から現在まで 10種の存在が知られていて、その多くは中国にいるんだよ。
今回の発見によって、ケツギョ属の魚が大昔の日本列島にもいたことが分かったんだ。
それからね、今回発見された「壱岐の長者原層」からは、大陸とのつながりが深い種がたくさん見つかっていて、当時の大陸と日本列島のつながりを考える上で、とっても重要なんだよ～♪

籔本博士！ 教えてくれてありがとう。化石から当時の大陸と日本列島のつながりを考えられるなんて、ロマンを感じるね～
期間限定公開なので、みんな見に来てね♪



【学芸員のよもやまばなし】

魚の和名のはなし

あらゆる生物には学名という、アルファベットで表記される世界共通の呼び名がつけられています。学名は国籍に関係なく、地球上の生き物を認識し、また研究するために役立ちます。一方、日本国内では和名という、現在は多くの場合カタカナで表記される日本語の呼び名があります。この和名は鳥類や哺乳類では国内外ほぼすべての種・亜種（以下、種類）に対して付けられていますが、魚の場合食品として流通する一部の例外を除けば、和名のある魚というのはたいてい日本国内に産する種類です。

魚には標準和名という考え方があります。これは、さまざまな和名の中でも、学術的・教育的なシーンにおいては、標準和名として定められた特定の和名を使用しようという考え方です。色々な図鑑を見てみると、どの図鑑でも同じ種に対しては和名が使われていると思います。鳥類や哺乳類でも標準和名という言葉はあり、これらのグループでは標準和名≒和名です。ところが、魚の場合にはちょっと事情が異なっています。

和名、と一口に言えば、「日本語で発話・表記される呼び名」すべてのことを指します。観賞魚の世界では、流通名として標準和名とは違う呼び名で流通する場合があります。食べ物としての魚はもっと多様です。みなさんの身近のスーパーマーケットではどんな魚が売られていますか？たとえば北九州のスーパーの鮮魚コーナーへ行くと、「小アジ」と表記されているものは標準和名ではマアジ、「アラカブ」はカサゴ、「キツネガレイ」はソウハチです。これが地域によっては「ジンタ」「ガシ」「シロカレイ」などと変化します。魚は食べ物として身近な存在であるために、地方名（方言名）という、地域ごとに異なる呼び名があるのです。このような地方名は、地域の連綿とした営みの中で育まれてきた郷土文化です。しかし、学術的に使用する場合、学名のように、あるひとつの呼び名が何を指しているか分からないと、問題になります。全く違っていればまだ良いでしょうが、「ノドグロ」のように、同じ名称が地域によって違う種のことを指している場合もあります。同じ種を対象に研究しているつもりが、別の種であったとしたら大変です。そこで、地域ごとの地方名の存在は認めつつ、学術的な使用については標準和名という、ひとつの決められた呼び名を使うように考えられてきたのです。

標準和名の中には、ある地域の地方名から採用されたものがたくさんあります。標準和名の考え方を初めて示したのは東京帝国大学の教官であった田中茂穂博士ですが、彼は海の魚については東京の市場での呼び名と、郷里高知県の呼び名を基準に、川や湖の魚については琵琶湖周辺での呼び名を基準に標準和名を決めていきました。たとえば、スゴモロコというのは琵琶湖での呼び名「スゴ」に、グループの呼び名「モロコ」を付け加えています。「カサゴ」というのは東京での呼び名そのままです。標準和名が広まることで、消えていった地方名もたくさんあります。「メダカ」（現在はキタノメダカとミナミメダカ）には５０００もの地方名がありましたが、現在ではほとんどなくなりました。教科書への掲載と普及が大きかったのでしょう。

自然史課学芸員　日比野友亮（魚類担当）

地域によって「ノドグロ」と呼ばれる魚。左：アカムツ　日本海西方での地方名。ただし近年では全国的な呼び名になりつつある）；右：ユメカサゴ（紀伊半島周辺での地方名）